

YMCA NEWS 金沢青年

No.36(2025年12月号)

金沢 YMCA 事務局:理事長 朝倉秀之 〒921-8041 金沢市泉3丁目10番16-4号
携帯電話 090-6539-5173 E-mail:asahide0927と@とgmail.comの組合せ
ホームページ <http://sophiruka.sakura.ne.jp/kanazawaymca/index.html>

金沢 YMCA 主催 “平和の集い 2025”を開催 ウクライナ避難民支援をテーマに

金沢 YMCA 主催・金沢ワイズメンズクラブ共催“平和の集い 2025”(北陸学院中学校・高等学校、北國新聞社後援)は、2025年11月15日(月)14:00～16:00、日本キリスト教団 金沢教会にて横山由利亜氏(公益財団法人 日本 YMCA 同盟執行理事 ウクライナ避難者支援プロジェクト責任者)のご講演「日本で暮らすウクライナ避難民はいま一歩走支援で見えてきたことー」を中心に開催されました。多くの皆様のご協力、ご尽力により70名の参加者が集う意義深い催しとなり、滞りなく記事にすることことができた幸いを感謝いたします。(編集者)

【プログラム】

司会	山内ミハル 金沢 YMCA 常務理事
14:00 開会	
奏 楽	南谷 弓枝 金沢教会オルガニスト
讃美歌	566
聖 書	ペテロの手紙 3章8節～12節
説 教	井ノ川 勝 金沢教会牧師
講 演	横山由利亜 日本 YMCA 同盟執行理事
挨 拶	朝倉秀之 金沢 YMCA 理事長
齊 唱	“青い空は” 全員
	ギター伴奏 藤井辰男 金沢 YMCA 評議員
	1. 青い空は青い今まで 子どもらに伝えたい 燃える八月の朝 影まで燃え尽きた 父の母の 兄弟たちの 命の重みを 肩に背負って 胸に抱いて
	2. 青い空は青い今まで 子どもらに伝えたい あの世 星は黙って 連れ去って行った 父の母の 兄弟たちの 命の重みを 今流す灯籠の 光に込めて
	3. 青い空は青い今まで 子どもらに伝えたい 全ての国から 戦(いくさ)の灯を消して 平和と愛と 友情の 命の輝きを この堅い握手と うたごえに込めて うたごえに込めて
16:00 閉会	

平和へのメッセージ

井ノ川 勝 牧師



敗戦後80年の今年、金沢教会の元長老の深谷松男氏が、遺書『21世紀の友に贈る平和へのメッセージ』を刊行。始めにこう記されている。平和の君イエスが誕生された時、ヘロデ王は幼児虐殺を行なった。これが平和を願いつつ陥る人間世界の現実である。天に響いた天使の平和の合唱を心魂に据えずして、平和を求めて進めない。「平和を求め、これを追え」(ペトロの手紙一3章11節)。

【講演者プロフィール】

京都府宇治市生まれ。東京女子大学入学後、日本 YMCA 同盟に入職し、約30年にわたり国内外の人道支援等に従事、2019年から社会協働プロジェクトの責任者となる。ロシアによるウクライナ侵攻後はウクライナ避難者支援プロジェクトを立ち上げて伴走支援を続ける。2022年7月に東京都と協定を結び、東京都ウクライナ避難民マッチング支援事業を行う。これまで約1700名の避難者を支援。日本キリスト教団三鷹教会会員。



《講演要約》

日本でウクライナ避難民はいま — 伴走支援で見えてきたこと —

横山 由利亞

公益財団法人 日本 YMCA 同盟執行理事 ウクライナ避難者支援プロジェクト責任者

2022年2月24日、ロシアによる軍事侵攻その当日から、ヨーロッパの国境を目指して逃げ来るウクライナの人たちに、ポーランド、モルドバなど近隣諸国のYMCAではシェルターや食料を提供し、行き先に応じて手助けをする活動を立ち上げました。

現在、1,951名のウクライナ人が日本での避難生活を余儀なくされています。YMCAは2022年3月、戦争前から日本で暮らすウクライナ人から家族の呼び寄せの相談を受け、渡航避難支援を開始。ウクライナ、ポーランドのYMCAと連携し、家族構成も事情も異なる166名(生後2ヶ月~86歳)を来日させてきました。ウクライナは、成人男性は徴兵制度のため国を出ることができないので、避難者の4分の3が女性、当初、多くが母子や高齢者でした。戦争が長引くにつれ、徴兵を目前に控えた16-17歳の少年や、「娘一人だけでも」と言って送り出される単身女性や、身心に障がいのある方、重い持病のある方なども増えています。



Fig. 1 避難者個別訪問の様子

命からがら来日しても、そこは安住の地ではありません。たとえば、ウクライナはとても教育熱心な国、IT先進国です。世界中どこに避難していても本国の小学校から大学まで、オンラインでの授業が受けられます。午前は日本語、午後は小学校や中学校に行き、夕方から深夜にかけてウクライナの授業を受けるという、ハードな生活に何を嫌になり引きこもる子や、愛国心に走る子どももいます。学び、スポーツし、交友関係を広げながら将来の夢を膨らませる、そういうかけがえのない時間をすべて奪われ、言葉にならない憤りや寂しさを心に抱えているのです。

女性の社会進出が進んでおり、多くが医師、弁護士、会計士、鉄道技師、エンジニアなどキャリアを持っています。しかし日本語の壁、国家資格の規制でなかなか思うようにいきません。支援の現場にジェンダーの視点は乏しく、「日本語ができない」というだけで、職歴や希望も聞かれることなく単純労働をあてが

われ、子どものような扱いにショックを受ける人もいます。

夫や父親、親戚や友人をウクライナに残し、自分が安全なところにいることに罪悪感を十字架のように背負い、先行きが見えず、どう生きていけばいいのかと希望が持てなくなっています。爆撃を受けない安全な地に避難して、政府や財団から支援金や住むところを与えられても、人はそれだけでは生きられません。

戦争が普通の生活者をどうやって蝕んでいくか。まず全員が「戦争になるとは思わなかった。そしてこんなに長期化するとは…」と話します。戦争はわかりやすい形では始まらず、ひとたび始まつたら、普通の生活者の人生を寸断し、進学の夢や、仕事のやりがい、コミュニティのつながり、そういうものをすべてゼロにするのです。また、同じ避難者同士であっても、決して一枚岩になれません。政治的な立場、出身地やロシアとのつながり、避難してきている家族構成や帰る家があるかどうかなど、猜疑心が生まれ、人びとを少しづつ分断させていきます。

いまウクライナからの避難民が最も直面しているのは、公的な財政支援の順次打ち切りという問題です。日本財団から年額100万円という生活費の支援を受けて生活していましたが、それらが来日から3年間で終了。来日時期にもよりますが、もうすでに終了している方が大半です。したがって、私たち支援団体の最大のテーマは、「どのように自立に向けて道筋を計画し、それを実現できるか」であります。しかし、自立とは何か、それは一律的に考えられないことは明らかです。「働きたい、自立したい」という気持ちはあっても現実的に厳しい方々、就労不可の子ども、学齢期の子ども、小さい子どもを抱える母親、高齢者、重い持病や障害を持つ方々が全体の半数を超えているのです。私たちは、多くの心配事を抱えながら自分のことは後回しになる母親には、子育てと並行してできる「ゆっくり学ぶ日本語教室」、地元でのパートタイムの仕事を紹介します。持病に不安のある高齢者には福祉サービスの情報を提供し、手芸や料理などの特技を生かして地域の人びとと交流できるように働きかけ、孤立を防ぎます。最近増えている一人で来日した若者は、漠然とした日本文化への憧れが強い一方で、物心ついでからコロナ禍と戦争で社会経験やロールモデルが不足し、相談相手がいない場合も多く、就学や就労支援に関する相談窓口へつなぎ、日本の友人づくりの機会、スポーツや野外体験など心身形成の機会の提供にも力を入れています。このように

一人一人、時間をかけて併走し、共に人生の良い方向性を探っていきます。



Fig. 2 クリスマス会 2024

ついで3年半でしたが、それでも、「キュウショク、プール、サイコウ」と小学生が話してくれ、母親は「近所に住む人からもらった」とひな人形やみかんなどれしそうに見せてくれます。「私たちにできることで恩返ししたい」と能登半島地震に募金を寄せてくれる避難者もいました。その度に、遠く1万キロ離れた日本で「先の見えないなかで人生のやり直し」を迫られた人たちにとって生きる希望や力になっているのは、国家や政治の大義、軍事の増強ではなく、日常の中での

人の優しさ、共に考え、泣き、笑い歩んでくれる市井の人びとの存在であることも気づかされます。



Fig. 3 YMCA フォーラム 202502 (左端イゴール)

恵まれた平和の国の支援者として与える側であるつもりだったが、「戦争の悲惨さ」「人間の尊厳の大切さ」、そして「日本は多様な人と暮らせる社会か、国籍に関わらずやり直しができる社会か」、むしろ教えられ、気づかされたのは私のほうでありました。

一日も早い平和の訪れを願いながらも、一方で長期化・定住も見据えて行かなければならず、私たちのアクションや発言が問われています。

“平和の集い 2025”に参加して

川原 文香(金沢市立兼六小学校教諭)

阪神淡路大震災ですら“歴史”的教科書に載っていたような世代の私にとって、戦争はゲームや漫画の中だけの話だった。「戦争は恐ろしい」という知識はあったものの、実際に戦争を体験した人も少なくなっていた中、実感としては希薄だった。

横山由利亜さんの講演で、私は自分の無知を思い知ることになった。ウクライナの人々が日々を脅かされながら生きていること、自分の命よりも祖国に残してきた家族の方を心配していること、日本に来て終わ



りではないことなど、呑気に過ぎていた自分が恥ずかしくなるほど、壮絶な暮らしをしていることを知った。

また、YMCA であれば国境を超えた支援ができるという事実も意外であった。今も世界中で人々を助けるために活動している人たちに対して、自分も何かしなければと考えさせられる機会となった。

“平和の集い 2025”を企画・実施して

「平和の集い 2025」を終えて
実行委員長 山内 ミハル

「平和の集い 2025」実施のため、日本 YMCA 同盟に講師紹介の依頼をしたところ、6 月に同盟理事の横山由利亜氏の推薦をいただいた。早速ご本人と日時、会場等の打ち合わせを行い、7 月に講演テーマと講師のプロフィールを得たので、学生会員の北村心宙君にチラシの作成を依頼した。

今回は、参加者から協力金 500 円(高校生以下無料)を得ることにし、そのことも明記したチラシ 3,000



部が 10 月に出来あがった。手分けして金沢市内及び近郊の 8 大学、1 専門学校、4 高等学校に学生・生徒への配布を依頼。さらに 11 教会、2 医院、2 書店にも会員、職員、顧客への配布を依頼した。

当日の参加者は前回の約半数と少なかったが、参加者からは、新聞、テレビなどの報道とは違った面から戦争の悲惨さを実感した、参加してよかったですなど好評の感想が寄せられた。

